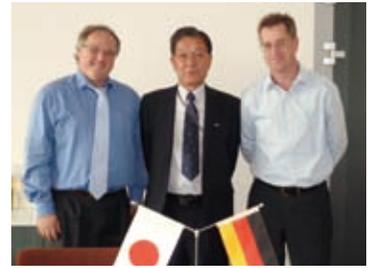


欧州三カ国を訪ねて — 美し国日本再認識

海外出張報告 4

下村幸男



繭型をしたアリアンツアリーナ Florian 氏 (左), Gerressen 氏 (右)と筆者

昨年8月末から1ヵ月弱、欧州3カ国を訪れた。ドイツはBAUER社の訪問、フランスはATMEA社の訪問、イタリアはラクイラの震災復興状況の視察を主目的とした。

8月31日早朝、BAUER社の迎えの車に揺られること1時間余り、バイエルンミュンヘンのホームグラウンド、アリアンツアリーナが見えた辺りから田園風景一色となり、世界的な建設機械メーカーがこんな片田舎に本当にあるのかと一時心配した。無事到着した目的地シュローベンハウゼンは古い町並みの残った瀟洒で実に美しい町であった。同社では、営業部長 Florian 氏と開発部長 Gerressen 氏から、今回の訪問目的である FDP System と GE System について詳しい説明を受けた。前者は無廃土の場所打ち杭工法で、振動騒音低減および掘削残土を生じない面で環境へ貢献度が高い。さらに、掘削しながら周辺土を押し固め、杭周の摩擦力と杭先端部の支持力を増大させる利点も有している。後者は地中と地表部との温度差を利用したエネルギー利用システムである。近年、日本でも CO₂ 排出量低減によるヒートアイランド現象抑制とランニングコスト低減に向けて多くの業者により実用化されてきている。日本での地熱利用はほとんどの場合地下数十 m 程度の地盤との温度差の利用にとどまっているが、同社では 3,000m 級の掘削機械も開発済みである。

パリ訪問の目的は中型の原子力発電所システムの開発を目的に設立された日仏合弁会社、ATMEA 社出向中の大成建設(株)の池田氏(昭和 58 年建築学科卒)との研究打ち合わせである。同氏は長年原子力畑の仕事に携わり首都圏を離れていることが多く、直接の打ち合わせは今回のパリが久しぶりであった。日本の原子力建屋では地震対策が最も重要となるが、欧州では航空機の衝突対策が最も重要との話である。パリではカタコンベの視察もできた。入り口脇の薄暗く長い螺旋階段を下りると、総延長 1.5km 程度にわたり「頭蓋骨の壁」が延々とつながっていた。ここにはフランス革命の際、現コンコルド広場でギロチンにかけられた人々の遺骨も眠っているとのことである。

9月8日夕刻 Bercy 駅からユーロナイトでローマに向かった。ローマ訪問の目的はラクイラの復興状況の視

察である。Abruzzo Earthquake は、2009年4月6日 Abruzzo 州の州都ラクイラ市周辺を震央とした M6.3、震源深さ約 10km の直下型地震である。同市はローマの北東 120km の盆地に都市が形成されている。都市の城壁が 14 世紀初期に完成し、17 世紀までの建築物の宝庫ともいわれているが、多くの貴重な建築物が甚大な被害を受けている。地震 2ヵ月後に震害調査に参加している博士課程(安達研)の太田宏君から出発前に震害調査の説明を受けるとともに貴重な写真、資料を提供していただいた。8月下旬から同市では微小地震が多発し、住民は屋外で夜を過ごす状況で視察は無理との情報をバリ滞在中に得ていたが、9月10日「行ける所まで行こう」と通訳の車でラクイラに向かった。中心部に近づくにつれ、倒壊建物の上部構造取り壊し後の基礎や犠牲になった方々の写真を掲げた立ち入り禁止フェンスを目にするようになった。アーケード街も人はまばらで、出会う人のほとんどが警官、軍人、復旧作業員、そして私たちのような視察が観光かわからない数人のグループであり、住民と思われる人にはほとんど出会えなかった。経済状況やお国柄、賄賂など、いくつか理由が挙げられるが、復興作業は遅々として進まず、復興にはまだ 10 年位はかかるのではということであった。

久々に訪ねたローマ、さらにスタンダールほかの多くの旅人が絶賛したナポリもサンタルチアなど特別な地区を除くと私には汚らしく感じられてならなかった。パリでは法的規制がないこともあり、少年が平然と歩きたばこをふかしている。ナポリはごみの山であった。ビール好きの私にはミュンヘンの活気が忘れられない。残念ながらオクトーバーフェストは経験できなかったが、ビアホールでのあののど越しが忘れられない。帰国後、合服のパンツのサイズが小さくなってしまっていた。(しもむらゆきお・短大教授)



応急補強のまま復興が遅々として進まないラクイラ旧市街の建物